MEETING REPORT

The 38 th Annual Meeting of the Infectious Diseases Society of America に参加して

付属病院　感染免疫内科
鯉渕　智彦

2000年9月7日から10日まで、アメリカ　ルイジアナ州、ニューオリンズで開かれた第38回 Infectious Diseases Society of America (IDSA) に参加しました。IDSAは主に臨床医を対象とし、広く感染症の最新情報を得るには最適の学会です。HIVなどのウイルス感染、細菌感染、真菌感染などテーマは幅広く分かれ、比較的少人数で議論が行われていました。内容は基礎的なものは少なく、診断や治療など臨床を意識したものがほとんどでした。

印象的だったのは Interactive session と題してクイズ形式で症例を提示する企画で、出席者は手元に用意されたボタンで答えを選択し、議論に加わることができます。日本ではあまり見かけない疾患も提示されましたが、参考になる部分も数多くありました。日本の学会とは異なり、楽しみながら知識を得ようという米国らしい一面と言えるでしょう。しかし、各セッション終了時には出席者にアンケートが配られ、演者のプレゼンテーションについて5段階評価をすることになっていて、なかなか厳しい面もあるようです。旅行医学のセッションには参加者が多く、海外渡航者の増加とともに大きな問題となっていることが伺えました。日本でも海外渡航者は近年1600万人を越え、今後ますます発展が望まれる分野です。当科においてはマラリアなどの輸入感染症の診療を行っていますが、日本国内では対応できる機関が少なく、我々もさらなる充実を図る予定です。ポスター発表会場では計645題もの演題があり、私は日本におけるB型肝炎ウイルスの遺伝子型に関しての発表を行いました。日本からは私も含めて数名しかポスター発表がなく、日本の感染症学の現状の一端を示しているかもしれません。

夜間の治安の悪さを考慮してか終了時刻は夜6時でしたが、朝7時から会議が始まり時差ボケも手伝ってややハードな日程でした。しかし、参加者たちの活発な議論を聞くことで、診療への新たな意欲を得ることができました。9月のアメリカ南部は暑いと聞いていましたが、夕方には会場近くの雄大なミシシッピ川の川面をそよぐ風が心地よいほどでした。

全体として米国の感染症学の歴史の長さ、人的質的両面での充実ぶりをしました。日本では臨床感染症学は欧米に比べ遅れている分野の一つであり、今回の学会参加は今後の研究と診療に大きな刺激となりました。

今回、幸運にも医科研の海外交流基金の援助を受けて参加することができました。このような機会を与えて下さった医科学研究所、当科岩本愛吉教授に感謝いたします。

編集後記

少し休みの期間があった本紙がですが、昨今の急速に動く状況に対応した所内情報紙としての役割を果たしてゆくべく、決意を新たにして復刊いたしました。以前に増してご愛顧のほど、よろしくお願い申しあげます。

本紙についてのご意見やご投稿を歓迎します。編集は管理系常務委員会と事務部庶務掛が担当しております。ご意見・ご投稿はそちら宛にお送りください。

第17号編集担当　森　茂郎

◎ 医科研 NOW 編集室／〒108-8639 東京都港区白金台4－6－1 東京大学医科学研究所 ☎03－5449－5572（庶務掛）
委員長：森　茂郎　委員：阿久津達也・大海　忍・高崎誠一・高木　智・田原秀晃・饗場　篤
印　刷：株共　進